

インドの大学における 「自己語りの社会学」の試みとその意義： *Hanv Konn?: Re-searching the Self*の 公開・出版の経緯から考える¹⁾

松川 恭子

はじめに

筆者は、博士後期課程の学生だった時、インドでの現地調査のために2000年4月から1年6カ月にわたってゴア大学社会学科 (Department of Sociology, Goa University) に留学生 (Visiting Student) として所属した。当時の現地指導教員、故アリトー・シークエイラ (Alito Siqueira, 1955~2019, 以降はアリトーと名前で呼ぶ) とは、2001年9月に調査期間が終わってから交流が続いた。特に筆者が大学にポストを得た2005年以降は、彼と会う時には研究だけでなく教育の問題を論じるようになった。その後、アリトーは「自己語りの社会学」の実践を自分が担当する学生と一緒にやるようになった。本稿は、彼が2019年8月に亡くなる前にオンラインで公開され、その後書籍の形で出版された *Hanv Konn?: Re-searching the Self* (以下、*Hanv Konn* と略記する)²⁾ で示された「自己語りの社会学」の方法論が持つ意義とインド社会においてそれが乗り越えなければならない困難について試論的に考察するものである。

本稿の形式について最初に一言断っておきたい。通常の論文において著者は、収集したデータの考察者としての立場にある。本稿では、筆者である松川自身のインド・ゴアでの経験を語りとして提示しながら、アリトーが行った「自己語りの社会学」とでも呼べる教育実践の意味を考える。よって、以降は「筆者」ではなく「私」という一人称で文章を進めていく。これは、近年、分野横断的に注目を浴びているオートエスノグラフィの筆者自身の実践であると捉えられる。

文化人類学では、1980年代後半に「ライティングカルチャー・ショック」が起り、「調査者/分析者」としての文化人類学者の客観的立場に疑問符が突きつけられた。これは、ジェイムズ・クリフォードと

ジョージ・マーカスが編集した論集『文化を書く (Wiring Culture)』で提起された問題である。その論点は、「文化人類学者の現地での調査者としての立ち位置が収集されたデータにも反映されており、そのデータの客観性を担保することはできない」とまとめることができる。クリフォードは論集の序論において、もはや文化人類学は、『未開』、『無文字』、『歴史がない』人々と定義される他者のために、自動的に付与される権威を笠に着て語ることはしないと述べている (Clifford and Marcus 1986: 10)。クリフォードは、植民地主義の権力により西欧が他者を表象 (=代表) する立場にあったことを問題視し、「部分的真実」しか語りえないことを明言した。川口 (2019) がまとめているように、ライティングカルチャー・ショックの後、調査者の立場を取り込んだ実験的民族誌が相次いで出版され、これまで記述される側であった「ネイティブの人類学」が提唱されるようになった。

自己に関する語りから自身の社会における立場を捉えようとするオートエスノグラフィは、調査者の「当事者性」を扱うという意味で、「ネイティブの人類学」とは異なる問題意識から発してきたものだが、近年、人類学でも注目を浴びている³⁾。本稿もその流れに連なる一つの試みである。

1. アリトー・シークエイラとの出会い

まず、私がアリトー・シークエイラと出会った経緯について書き留めておきたい。筆者は文部省 (当時) アジア諸国等派遣留学生に採用され、1年半の現地調査のために2000年4月にゴアに渡航した。先述したようにゴア大学社会学科に留学生として所属した。イギリス留学中の1998年にアジア諸国等派遣留学生制度に応募するため最初にゴア大学にEメールで問い合わせをしたときに返事を送ってくれたのがアリトーだっ

た。2000年当時の社会学科長だったN. ジャヤラム (N. Jayaram) 教授を筆頭に学科教員は他州出身者がほとんどだったため、ゴア人である⁴⁾ 彼がゴア社会について研究したいと希望していた私の指導教員になったと考えられる。実際に2000年4月に社会学科で初めて対面して筆者が抱いた感想は、「親切そうだが、型破りな面を持っていそうな人である」というものだった。「ゴアのキリスト教文化」を博士論文の研究テーマにしたいと伝えていたが、「まあ、ゴア社会について色々文献を読むのが先決だ」と言われた。その結果、ゴア大学附属図書館の関連書籍を読む漁る生活が始まった。

その初対面の折に私のその後の研究を方向づけるやり取りがあった。私は「文化人類学者としてゴアの現地語であるコンカニー語 (Konkani) を習得する必要があるが、どこで勉強できるか」とアリトーに尋ねた。彼は「コンカニー語というが、君はデーヴァナーガリーのコンカニー語を学びたいのか、あるいはローミーのコンカニー語が学びたいのか、どちらなんだ」と答えが返ってきた。その言葉の意味がわからず、困惑する私に対して、アリトーは「二つのコンカニー語」について説明してくれた⁵⁾。

コンカニー語には色々な種類があるが、大きく分けると、インドの連邦公用語であるヒンディー語や古典語のサンスクリット語を記述する文字であるデーヴァナーガリー文字 (Devanagari) で筆記されるコンカニー語とラテン文字で筆記されるコンカニー語 (ローミー (Romi)) がある。そして、前者はヒンドゥー教徒がよく使うのに対して、後者はキリスト教徒が使うことが多い⁶⁾。そして、文法は共通しているものの、前者にはインド古典語のサンスクリット語系の単語が多いのに対し、後者にはポルトガル語由来の単語が多くみられる。このやり取りから1ヶ月経ったある日、ゴアで発行されている英語新聞『ナヴヒンド・タイムズ (The Navhind Times)』に掲載された「地元市議会がコンカニー語とともにマラーティー語をゴア州公用語にすることを州政府に求める決議がなされた」との記事が目に入った⁷⁾。調べていくと、1987年2月にコンカニー語はゴア州の公用語としての地位を得るに至ったが、その前にマラーティー語とコンカニー語それぞれを州公用語にすることを目指す二つのグループが対立した結果、1986年末には州の各地で衝突が起こり、道路が封鎖される事態にまでなっていたことがわかった。「ゴアの隣州マハーラーシュトラ州の州公用語であるマラーティー語がなぜゴ

ア州の公用語として求められたのか」という問いから、ゴア渡航前にはまったく想定していなかった「ゴアにおける多言語状況と州公用語化問題」をテーマとして調査を開始することになった。調査の過程で、ポルトガル支配によって形づくられた多言語状況がゴアの社会・文化的現状と密接に関わっていることが浮かび上がり、最終的には「ゴアのキリスト教文化」関連の資料収集・聞き取り調査も行った。

現地調査の成果をまとめた博士論文『『私たちのことば』を求めて—インド、ゴア社会における多言語状況の文化人類学的研究—』を2005年12月に大阪大学大学院人間科学研究科に提出した。その論文は後に松川 (2014) として公刊された。この経緯からもわかるように、アリトーは私の研究を方向づけた「インドにおける師 (メンター) だった。しばらくしてわかったのは、「本人にとって思いもよらない問いを突きつけて、新たな問題にその人の目を向けさせる」彼の教育方法は私だけに対するものではなく、多くの人たちに向けられ、彼ら／彼女たちの人生に転換をもたらしたということである。

2. アリトー・シークエイラという人

アリトーは、自分自身について語る事が生前ほとんどなかった。ゴア北部アンジュナ村出身でキリスト教徒の高カースト、チャルドであり、ボンベイ大学で修士号を取得後、1987年にゴア大学で教鞭をとり始めた。この一連の経歴については、アリトーを知る筆者の知人と話す中で徐々に明らかになった。ゴアにおける観光の影響を主な調査テーマとしていたが、彼のゴア社会に関する知見は深く、ゴア内、インド内外を問わず幅広い人的ネットワークを持っていた。ゴアが元ポルトガル植民地であったことから、ポルトガルとブラジルの大学に招聘され、ゴア社会に関する講義を行ったこともある。そのため、ゴアで調査をしたいという海外の研究者は必ず彼のところを訪れた。私がゴア大学に所属していた当時も、1990年代からゴア社会の宗教の混淆 (シンクレティズム) に関する調査を行っているハイデルベルグ大学 (当時、現在はアリゾナ州立大学教授) のアレグザンダー・ヘン (Alexander Henn) 教授がゴア大学の客員教授として所属し、アリトーと一緒に特別授業を企画した。ヘン教授は、アリトーは彼の共同研究者のようなものであり、ゴアの民俗劇ザゴール (zagor) の調査のためにゴアの様々な場所と一緒に訪れたと語っていた⁸⁾。アリトーは現

場第一主義の人であり、学問的知を論文の形にまとめるという作業が苦手だった。本人もそれを自覚しており、「*Hanv Konn*の序論をなかなか書けない」と2010年頃に私がゴアに行った時に語っていた⁹⁾。彼は経験から知を紡ぎ出すというスタイルを持ち、人と議論することを好んだ。そのスタイルが後に *Hanv Konn* にも示されたユニークな教育実践につながるようになった。

アリトーの友人のジャーナリストで、*Hanv Konn* を書籍として世に出した出版社 Goa 1556¹⁰⁾ を経営するフレデリック・ノロンニャ (Frederick Noronha) は、アリトーを偲ぶ文章の中で彼との関係性を吐露している (Noronha 2021)。二人は多くの時間をともに過ごし、議論を重ねた。時には議論の応酬が激しくなりすぎ、互いに苦い思いをすることもあったという。ノロンニャによれば、アリトー・シークエイラは、第一に偉大な教師だった。社会の主流と不公平に抗するという自身の軸がぶれることが決してなく、ゴアの都市部ではなく内陸部である農村出身の恵まれない学生たちを特に支え、導いた。ゴアにおいて観光が社会に及ぼす影響、ゴアの植民地経験、カースト問題などについて議論する中で、不当だと考える物事に対しては徹底的に抗戦するため、同僚や学生が困惑することも多々あった。第二に、アリトーは、ゴア研究の地平を広げた。第三に、アリトーは他者にとっては予測がつかず、型にはまらない人物だった。彼は高カーストの生まれだったが、恵まれず、無力な状態にある若者たち、例えば低カースト、指定カースト、指定部族¹¹⁾ の学生たちに対する共感 (エンパシー) を有していた。教室の中でのパフォーマンスがよくない学生たちのことを、単に怠けている、頭が悪いとは捉えなかった。彼ら／彼女たちが、主流ではない言語の使用者であり、カーストや階級の面で下位に置かれていることから生じる厳しい現実と戦っていると考えたのである。ノロンニャの指摘は、アリトーがなぜ *Hanv Konn* で示された教育実践に至ったのか、その前提を示しており興味深い。

3. 「自己語り」を教育に取り入れる

—「教室内での学び」を越えるために

上記のノロンニャのアリトー評でみたように、教室の中での学生の低パフォーマンスの理由を学生本人に帰さず、社会や制度の問題として引き受けたところに彼の社会学者／教育者としての矜持があった。「教室

内での学び」の限界については、2005年に私が大学にポストを得た後に同じ教員としての立場で彼と話をするようになってからよく話題に上っていた。アリトーが教えていたゴア大学社会学科の修士課程に進学してくる学生は、多くが女子学生だった。その大半が村落部の出身であり、社会的な安定のために教職を得ることを目的としていた。つまり、社会学を学問的に探究しようという学生はほとんどいなかったのである。そのような学生たちは、教科書中心に展開される講義に関心を示さなかった。

アリトーは、学生たち自身にその問題の原因があるとは考えず、社会学の知の教育における提示方法が間違っていると捉えた。*Hanv Konn* のウェブ版に公開されたアリトーの一文「どこに虎は住んでいる?—留保 vs. 包摂 (Where does the Tiger live?: Reservation vs. Inclusion)」にそれが如実に示されている¹²⁾。彼は、「虎はどこに住んでいるか」という試験問題に「自分の家の裏」と答えた学生の解答が間違いとされた話を導入部で示す。そして、試験問題の作成者は「森林」という正答を用意していたが、実際に森林に囲まれた辺境部に住む学生が試験を受けるような事態を想定していなかったのだと指摘する。アリトーは同様の話として、社会学の講義を受講している学生と教員の間の会話を紹介する。

学生：先生、私たちがカーストについて学ぶ時に、なぜグリエ (G.S. Ghurye)、シュリーニヴァス (M. N. Srinivas)、ルイ・デュモン (Luis Dumont) から始めるのですか？彼らがブラーマンや白人だからですか？

教員：それは彼らが社会学者の先達であり、カーストを理解するための基本的な概念を考え出したからです。例えば、ブラーマン化、サンスクリット化、ヒエラルキー等です。著者のカーストや人種には関係ありません。(そして、この教員は、当該学生がおそらくダリト¹³⁾の運動家であるのだろうと気づく) …シラバスの第4章では、アンベードカル博士のことが扱われますよ¹⁴⁾。

学生：インド独立から50年以上も経っているのに、アンベードカル博士はいまだ4番目なのですか？サンスクリット化と比べると、独立インドにおけるカーストの問題を理解するのに最も重要な概念は不平等ではないでしょうか？



写真1 筆者と在りし日のアリトー・シークエイラ (2008年9月, Gasper D'Souza 撮影)

そして、アリトーは、学術的知を有しているかどうか
が学業成績で測られる現状に警鐘を鳴らす。知識は文脈によるものであり、普遍的な知はない。学生にとって重要な概念は、彼ら／彼女たちの立場によって変わってくる。部族出身者の学びは、上位カーストの学生とは異なるのである。

それぞれの学生にとって意義のある学びを実現するためには、その学生の立ち位置を知る必要がある。また、学生自身もそれを意識化することによって社会学の学びと知を自分のものとするができる。アリトーは、その方法として「自己語り」と教室外での経験を採用した。甲南大学文学部社会学科でのメディア実践系授業について論じた別稿(松川・辻野・西川 2018)で書いたことであるが、2007年にトヨタ財団の助成を受けてアリトーとともにゴアと私が当時勤務していた大学が立地する奈良をつなげる活動を行っていた時に、彼からデジタル・ストーリーテリング (Digital Storytelling, DST) を紹介された。DSTは、パソコンで作成する「自己語り」の動画であり、アメリカ・カリフォルニアにあるデジタル・ストーリーテリングのためのセンター (Center for Digital Storytelling) が「誰にでも語るべき物語がある」というコンセプトの下、ワークショップ形式で他者と協働して自分の物語を探求する方法を生み出し、世界中で実践されている¹⁵⁾。ちょうどその頃、アリトーは、学生と一緒に「自己を語る」方法を模索していたようである。*Hanv Konn* に寄稿した中で最年長で、現在ゴアのチョーグレー・カレッジ (Smt. Parvatibai Chowgule College) で教鞭を執るサチン・モラエス (Sachin Moraes) は、アリトーが「曼陀羅プロジェクト」を

授業内で実施したと私に話してくれた。自身の社会における立ち位置を「家族」「村落」といった身近なところから考えて発表するプロジェクトだったという。まず中心に自分を置き、自分をめぐる社会的な制度を周りに置いていくことから「曼陀羅」と名前をつけたのだろう¹⁶⁾。

しかし、最終的にアリトーが選んだのは、学生自身が「自己語り」(Self-narrative)の方法を援用することで修士課程の集大成である論文を仕上げることだった。それは、社会学の知の助けを得て自身の社会における位置づけを確認し、これまでの自分と他者の関係を改めて問い直すという営みだった。

4. *Hanv Konn?: Re-researching the Self* 公開・出版とその意義

アリトーが「自己語り」の方法を用いて修士課程の学生たちに修士論文を執筆することを推奨するようになったのは、DSTの試みの後の2008~2009年あたりだったと考えられる¹⁷⁾。筆者が出産のためゴアに渡航できなかった2011年10月7日にアリトーから受け取ったメールに *Hanv Konn* の原型となる論集の出版についてのアイデアが記された企画書が添付されていた。タイトルは『「ヴェリップが書くことで反撃する」他—ゴアにおける女性の声 (“The Velip Writes Back” and other Essays: Women’s voices in Goa)』だった。少し長い、アリトーが書いた文章を翻訳して引用する¹⁸⁾。

これらの論文は元々修士課程プログラムのための修士論文として執筆されたものである。学生た

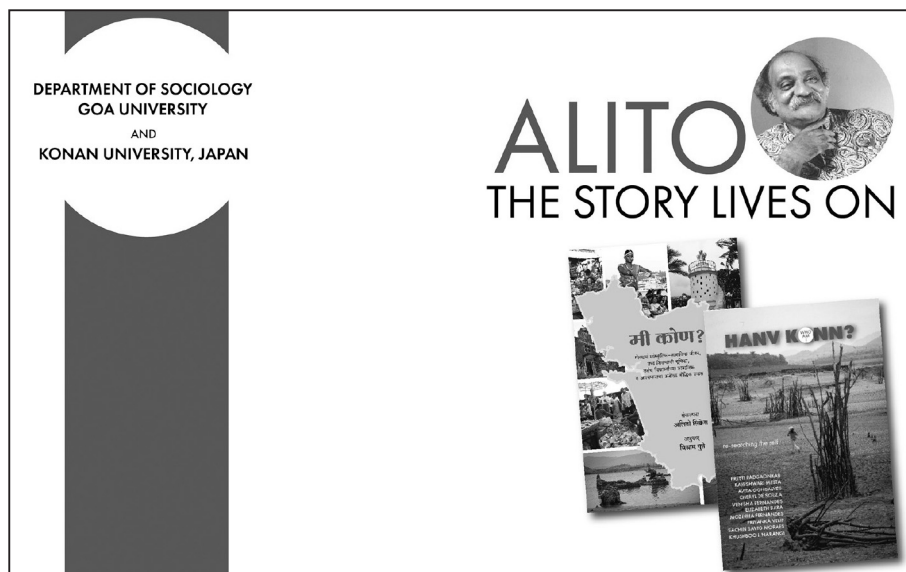


図1： *Hanv Konn?* の寄稿者を招いて2021年11月27日にオンラインで実施されたセミナー“Meet the *Hanv Konn* authors”で使用された背景画像。*Hanv Konn* の出版チームの一人である Gasper D’Souza 提供。

ちがテキストに自分たちのアイデンティティを注ぎ込んだ「アイデンティティ・テキスト」（書かれたもの、話されたもの、映像形式のもの、音楽的形式のもの、または複合的なもの）である。これらのテキストは、彼女たち／彼ら自身と世界を映し出す鏡となり、驚くほど複雑で積極的な形で、彼女たち／彼らのアイデンティティが照射されている。よって、本書は異なる形に広がり、調和する必要のない複数の声を提供する。それらは、標準的なゴアとゴアのコミュニティとは劇的に異なるものである。

本書の目的は、サバルタン女性の生き生きとした複数の声が公共圏に存在するように仕向けることと、ゴアの生き生きとした言説に大学を統合させなければならない／大学を統合できる方法、また学生たちの生が彼女たち／彼らの大学での著作物に入り込むようにする方法に関するもうひとつの方法を提示することである。これらの代替的知は、代替的な源泉、発見の型式、表現媒体と場を必要とする。つまり、複数の声である。本書は、学ぶ者たちを受動的な消費者ではなく、知の生産者とすることによって、いかにして喜びを学びに取り戻すことができるのかを主張する。学生たちが、自身と自身のコミュニティに関する知識を生産することを通じて学ぶプロセスは、不活発で疎外された社会学の消費とは革新的に異なるものである。

両方のやり方を行うように努力する必要がある—世界を教室に持ち込む、それ以上に教室を世界に連れていく。

一読しての感想は、「ヴェリッパが書くことで反撃する (The Velip Strikes Back)」は、映画『スターウォーズ 帝国の逆襲 (The Empire Strikes Back)』のタイトルを踏まえていて面白いというものだった。そして、「標準的なゴアとゴアのコミュニティとは劇的に異なる」複数の声を提示するという力強い文章に興味を覚え、ぜひサポートしたいと感じたことを覚えている。

その後、学生たちの論文を出版するためのリライト作業に時間がかかったのと、アリトー自身が序論を書き上げるのに時間を要したのとで、なかなか本書の出版まで至らなかった。2018年にアリトーが癌を患っていることがわかった後、急ピッチで作業が進められた。私は2017年12月に私的旅行でゴアを訪れた時にアリトーに会った後、2018年9月にゴアに渡航予定だったが、台風で関西国際空港が水没したために予定をキャンセルせざるをえなかった。そして、彼の病気について何も知らないまま、時間が過ぎた。2019年7月に突然アリトーからEメールで連絡があり、*Hanv Konn* のウェブサイトが完成して論文が公開されたことを知った。彼は自身の癌のことにはまったく触れず、7月末に私が9月にゴアに久しぶりに渡航予定であることを連絡すると、初めて自分が手術を控えていることを教えてくれた。特に深刻そうな文面ではなかったため、彼と再会できると信じ、8月初めに夫の実家のあ

るフィンランドに出発した。そして、8月8日に共通の知人であり、*Hanv Konn* の出版チームの一人であるガスパール・デソーザ (Gasper D'Souza) からアリトーが癌の手術後に突然脳内出血を起こし、帰らぬ人になったことを知らされた。

アリトーは、ウェブサイト公開後、*Hanv Konn* を書籍としてフレデリック・ノロンニャが運営する出版社 Goa 1556 から出版する手筈をすべて整えていた。しかし、2019年12月に中国武漢で新型コロナ感染症が発生した後、世界中に広がったコロナ禍により、出版は遅れることになった。アリトーの教え子の一人であり、自身も部族出身者であるゆえに苦勞してゴア大学の助教となったファヴィタ・ダイアス (Favita Dias)、友人のサリール・チャトルヴェディ、ガスパール・デソーザ、ヴァスダ・サワイカール (Vasudha Sawaiker) で構成される *Hanv Konn* の出版チームの尽力により、書籍の形で世に出されたのはアリトーが世を去ってから2年経った2021年7月のことだった。

以下、*Hanv Konn* に収録された論文タイトル、著者名と扱われたテーマを併記する。

- My Ancestral Home : Where Is It? (Preeti Padgaonkar) …新たな土地への移住者
- Religion and Identity in Transition (Rajeshwari Mehta) …移民 (ゴア社会のアウトサイダー)
- Ashamed of Speaking in Konkani (Avita Gonsalves) …コーンカニー語のステータス
- The Women Vendors at the Mapusa Friday Market (Vheryl de Souza) …女性労働者
- Remembering the Past: Place and Memory After Displacement (Venisha Fernandes) …ダム開発による移住と場所とつながるアイデンティティ
- Why Dance? (Elizabeth Bara) …ゴア外からやってきた部族のアイデンティティ
- Where Have All the Songs and Rituals Gone? (Mozinha Fernandes) …部族のアイデンティティ
- A Velip Writes Back (Priyanka Velip) …部族のアイデンティティ
- Negotiating Male Migration: The Experience of Women in Goa (Sachin Savio Moraes) …夫が単身で出稼ぎに出ている妻の問題
- Higher Education among Muslim Girls (Khushboo I. Narangi) …イスラーム教徒の女子学生の教育問題

移民、部族 (トライブ)、イスラーム教徒の女子学生

など、ゴア社会でマイノリティとして認識されているコミュニティ出身者である学生たちが自分の社会的立場を問い直す論考が並んでいる。2011年にメールで送られてきた企画書では「女性の声」というジェンダー的側面が強調されていたが、最終的には「女性であり、…である」といった複合的なアイデンティティを「私は誰?」という問いの下に提示するという形になった。10人の執筆者のうち男性は一人だけであるが、女性 (夫の出稼ぎにより残された妻) の問題を論じている。

執筆者たちは、修士論文執筆の経験を通して、自身を取り巻く社会の問題、不平等に気づくことになった。おそらく、*Hanv Konn* をアリトーが着想するきっかけとなった「一人のヴェリップが書くことで反撃する (A Velip Writes Back)」において、ゴアの指定部族ヴェリップ出身者であるプリヤンカ・ヴェリップは、ゴアの4つの部族コミュニティ (ガウダ (Gawda)、クンビ (Kunbi)、ヴェリップ (Velip)、ダンガル (Dhangar)、それぞれの頭文字で GAKUVED と呼ばれることもある) がどのようにゴアの歴史で語られてきたかを議論している。彼女は、以下の一文で章を始めている。

どの部族コミュニティにも起源神話がある。部族出身の一人の女性が大学に進学すれば、彼女は自身を形作る歴史を知りたいと思う。彼女は書籍を読み、歴史家たちや文化を扱う学者たちが様々なことを述べているのに困惑させられる。だが、彼女にとって一つのことが明確になる。彼女は発見する。学者たちは部族コミュニティの歴史を記述することで、自分たちが属するコミュニティが上位にあると示しているのである。ヴェリップが自身のアイデンティティと歴史を回復する方法は一つ、「書いて反撃すること」である (*Hanv Konn*, p. 111)。

彼女も他の執筆者と同様、ゴアのカレッジで助教として教鞭を執っている。そして、修士論文で自身の問題として引き受けた研究課題である「ゴア社会における部族の位置づけ」や「部族女性の現状」についての研究を続けている。*Hanv Konn* の執筆者たちは、社会学の知を武器とすることで、自身の差別・不平等の経験を社会の問題として認識した。同様の経験を後に続く若者たちにもしてほしいと願い、カレッジでアリトーから受け継いだやり方で授業を行っている。その詳細については、今後聞き取りを進めることで、別に

稿を改めて紹介したい。

5. おわりに：留保枠をめぐるアリの活動とその後

アリは2015年にゴア大学を辞した。それは、大学教員の立場では部族出身の学生たちのサポートを十分にできないと彼が自覚し、大学外で活動を行うためだったようだ。彼の晩年の2017年、2018年に私はアリとしっかりと話す機会を持てなかったため知らなかったが、2022年9月に3年振りにインドに渡航し、*Hanv Konn* チームと話したところ、彼がゴア大学や他のカレッジで低カーストや指定部族を対象としたポスト（留保枠と呼ばれる）に対して適正な募集が行われていないことに反対する運動を展開していたことを知った。「自己語り」によって学生たちに新たな可能性を示したアリだったが、ゴア社会におけるカースト・部族をめぐる闘争に巻き込まれることになったのだ。

インドにおける留保制度が提供する留保枠をめぐる争いは1990年代から始まり、インド社会における根深い問題として議論され続けてきた。留保制度は、大学の入学枠や公務員枠を社会的に劣位に置かれてきた指定カーストや指定部族に割り当て、社会的エンパワーメントを促すための制度である。インド版アファーマティブ・アクションと言えるだろう。ただし、大学の入試の点数が一般枠より低くても合格できる、上位カーストに対する逆差別であるといった意見がある。1980年に出されたマングル委員会の報告書の提言に従って1990年のV. P. シン首相がその他の後進諸階級（Other Backward Classes）まで留保の対象を広げ、留保枠が49.5パーセントとなった結果、反対運動が巻き起こった。

ゴアは、そのような動きとは一見無縁であるように見えるが、実際は指定カーストや指定部族に対する差別は根深い。*Hanv Konn* の指定部族の寄稿者たちは、学校で教師から受けた差別について語っている。また、2016年のオンライン新聞記事によれば、ゴア州政府による雇用の41%は指定カースト・指定部族・その他の後進諸階級に留保されているはずだが、実際には23.4%しかその枠で雇用されていないという¹⁹⁾。

インドの高等教育における差別と包摂の問題は、例えばデシュパンデとザカリアス（Deshpande and Zacharias 2013）が高等教育へのアクセスの問題を解消する必要があると指摘し、オヴィチェガン

（Ovichagan 2018）は、ダリト（指定カースト）である自身の経験から高等教育における差別を論じている。この問題は今もインド社会に大きな影を落としている。

アリは、学生たちのエンパワーメントを達成した。その結果、ゴア社会で隠されてきた差別の問題を人々の眼前に引きずり出した。おそらくアリの元学生たちが「自己語りの社会学」を受け継いで目指していくのは、自己語りによって社会の問題に気づいた学生たちが連帯し、社会の不平等に声を上げ続けていくことだろう。上記で述べたように留保枠の問題は人々の間に分断を生んでおり、乗り越えていくべき困難も多い。アリの遺志を元学生たちとともに受け継ぎ、日本人の大学教員である私に何ができるか、私自身も「自己語り」を継続していくことで自身の立場を問い直していくことになる。本稿は、その第一歩である。

注

- 1) 本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（C））「インド・ゴアにおける自己語り／複数メディアを活用した教育と発信の人類学的実践研究」（課題番号20K01206）により行った調査の成果の一部をまとめたものである。
- 2) “Hanv konn?” は、ゴアの現地語コーンカニー語で「私は誰？」の意味である。
- 3) 例えば在日華僑華人である自身を論じた陳（2022）を挙げることができる。
- 4) ただし、彼が生まれたのはゴアではなく、東アフリカのケニア（ナイロビ）である。
- 5) 2000年4月4日のフィールドノートより。
- 6) ゴアは1510年から1961年までポルトガルの支配下にあった。当時ポルトガルの海外進出はカトリックの布教をともなっており、フランシスコ会やイエズス会の宣教師がゴアにわたってきて現地のヒンドゥー教徒のキリスト教への改宗を進めた（松川 2006）。
- 7) “MMC seeks equal status for Marathi”, *The Navhind Times*, May 6, 2000.
- 8) ヘン教授の調査の成果は、後に Henn (2014) として出版された。
- 9) *Hanv Konn* の序論を完成させるために、論集の校正者であり、アリのよき友人であったサリール・チャトルヴェディ（Salil Chaturvedi）は、二人で合宿を行い、無理やり書かせたと語っている（2022年9月18日の聞き取りより）。
- 10) 1556年はゴアに活版印刷機がもたらされた年であり、ゴアにおいて書籍の印刷が始まった年である。
- 11) 指定カースト（scheduled caste）は、かつては「不可触民（untouchables）」と呼ばれていた人々である。指定カースト、指定部族ともに歴史的に虐げられてきた背景を持ち、インド社会で社会的・経済的に最下層に置かれてきたことから、インド憲法で指定され、地

位を引き上げるための政策（例えば留保制度）がとられてきた。

- 12) Alito Siqueira, "Where does the Tiger live?: Reservation vs. Inclusion", *Hanv Konn?: Re-searching the Self*. URL: <https://hanvkonn.wordpress.com/2019/09/05/where-does-the-tiger-live-reservation-vs-inclusion/> (最終アクセス 2022年12月3日)
- 13) 「ダリト (Dalit)」は、「不可触民」の代わりに指定カーストの人々が自分たちのことを指す言葉としてインドの独立後に使い始められた言葉である。「虐げられてきた者」という意味がある。
- 14) アンベードカル博士 (Dr. Bhimrao Ramji Ambedkar) は、指定カースト出身でインド憲法の起草者の一人である。カースト差別を嫌悪し、仏教に改宗した。彼の後に続いて多くの指定カーストの人々が仏教徒になった。
- 15) デジタル・ストーリーテリングのためのセンターの活動については、以下を参照のこと。 <https://www.storycenter.org/> (2022年12月3日最終アクセス)
- 16) サチン・モラエスからの聞き取りによる (2022年9月19日)。
- 17) 2022年9月16~22日にゴアに渡航して *Hanv Konn* の執筆者にインタビューした際に、以下がわかった。最も古い修了生であるサチン・モラエスが2005年の修了であり、現在ゴア大学社会学科助教 (Assistant Professor) のモジーニャ・フェルナンデス (Mozinha Fernandes) が2009年修了である。もう一人インタビューをしたヴェニシャ・フェルナンデス (Venisha Fernandes) は2011年の修了生である。
- 18) 原文は以下のとおりである (文法的な間違いはあるが、そのまま提示する)。

These essays were originally written as dissertations for their MA program. They are 'identity texts' insofar as students invest their identities in these texts (written, spoken, visual, musical, or combinations'. These texts then hold a mirror up to themselves and the world in which their identities are reflected back in surprising, complex and positive ways. Hence the book provides a divergent and not necessarily harmonious set of voices which differ dramatically from some standard perceptions of Goa and its communities.

The objective of the book is to allow fresh voices from subaltern women to populate the public sphere and to demonstrate yet another way as to how the university must and can integrate into Goa's vibrant popular discourse and so also how the students lives can enter into their university work. These alternative knowledges' also require alternative sources, modes of discovery, mediums of expression and locations i.e. polyphonic

voices. The book demonstrates how joy can be brought back into learning by making the learners creators of knowledge and not just passive consumers. The process of students learning through producing knowledge about themselves and their communities is radically different from the inactive and alienated consumption of sociology.

The effort is to work both ways: Bring the world into the classroom as much as to take the classroom into the world.

- 19) Kanekar, Amita, 2016, "Goa's reservation scam - Part II" *Herald*, published on July 28, 2016. URL: <https://www.heraldgoa.in/Edit/Opinions/Goa%E2%80%99s-reservation-scam-Part-II/104520> (最終アクセス 2022年12月4日)

参考文献

- 川口幸大 2019 「東北の関西人—自己／他者認識についてのオートエスノグラフィ」『文化人類学』84(2): 153-171.
- 陳 天璽 2022 「在日華僑華人3世代のオートエスノグラフィ：横浜中華街で生まれ育った「私」の home-ness と homelessness」『文化人類学』87(2): 224-242.
- 松川恭子 2006 「宣教師による現地語のテキスト化とその帰結：インド，ゴア州におけるキリスト教徒の言語アイデンティティの現在」『キリスト教と文明化の人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告62）pp. 227-251.
- 松川恭子 2014 『「私たちのことば」の行方—インド・ゴア社会における多言語状況の文化人類学』風響社.
- 松川恭子・辻野理花・西川麦子 2018 『メディア実践系』授業の作り方 (実践編)：他者から学び，伝える方法』『甲南大學紀要. 文学編』168: 105-132.
- Deshpande, Satish and Zacharias, Usha, 2013, *Beyond Inclusion: The Practice of Equal Access in Indian Higher Education*. New Delhi; London: Routledge.
- Henn, Alexander, 2014, *Hindu-Catholic Encounters in Goa: Religion, Colonialism, and Modernity*. Bloomington: Indiana University Press.
- Noronha, Frederick, 2021, "A scholar who earned his fans, Alito Siqueira", The Navhind Times, published online on August 8.
URL: <https://www.navhindtimes.in/2021/08/08/magazines/panorama/a-scholar-who-earned-his-fans-alito-siqueira/> (最終アクセス 2022年12月3日)
- Ovichegan, Samson K., 2018, *Faces of Discrimination in Higher Education in India: Quota Policy, Social Justice and the Dalits*. Abingdon: Routledge.